

輝け!医師事務作業補助者の人間力

NPO 法人日本医師事務作業補助研究会 第5回全国大会活動報告

大会長 武田まゆみ（宮崎県・潤和会記念病院）



2015年6月27日（土）・28日（日）の両日、宮崎観光ホテル（宮崎県宮崎市）にて第5回全国大会を開催いたしました。全国39都道府県から500名を超える方々にご参加いただき盛会となりました。

内容は、各分野で著名な3名の先生方によるご講演や、経験豊かな4名のシンポジストをお招きし、医師事務作業補助者が職種確立に向けてどのようにアクションをおこしていくとよいのか議論しました。さらには、実務に直結する知識向上を目的としてモーニングセミナーを開催しました。また、会員による一般演題には、58演題（口演46演題、ポスター12演題）もの登録をいただき、医師事務作業補助者に限らず病院事務職として

も研究成果を発信し、現状や課題を皆で共有する貴重な時間となりました。ランチョンセミナーでは、他団体（企業）との共同企画を通じて、医療・介護の視野を広げる機会となりました。そのほか、全国各地で開催されております支部活動についてもポスター掲示しました。



▲大会長講演の様子

■「輝け！医師事務作業補助者の人間力」

2008年の診療報酬改定に伴い誕生し、今がまさに旬と言える医師事務作業補助者ですが、大会テーマである「輝く」とは少し離れた場所にいるような気がしていました。その役割は、活躍のフィールドである地域や病院の特性を色濃く反映しているものの、加算という評価が2008年以前に戻ったとしても、安定的かつ継続的な医療提供体制の維持に欠かせない存在になったことは明らかなのに、医療現場にいる実務者はいつもどこか不安

を抱えているように思います。それは、他の職種と異なり、医師事務作業補助者は客観的なスキル評価を受けていないということに起因しているのかもしれませんが、例えば、「あなたは人間力が備わっているね」と褒められても、空腹が満たされるわけではありません。しかし、医師事務作業補助者という職種には特に求められる資質であることは確かです、それが既に備わっている人、もしくは不足していれば補えるよう自ら変容できる人がこの職種には多いように感じています。つまり、実践から学んだ知識や応用力、多職種連携が円滑に行えるコミュニケーションスキル、また、よりよいものを目指し努力する向上心など、ひとりひとりが培ってきた人間力を味方につけて、10年後もきらきら輝けるよう、多彩で経験豊かな先達に学び、切磋琢磨する仲間と深慮したく、このテーマにしました。



▲河野俊嗣宮崎県知事

■宮崎県知事からのエール

開会式では、河野俊嗣知事（宮崎県）からご挨拶がありました。宮崎県は、人口 111 万人で 10 万人あたりの医師数は全国平均を上回る状況ですが、中山間部や過疎地域では医師・看護師不足が顕著であり、医療提供体制の充実が大きな課題となっているということでした。このような背景もあり、県では、医療提供体制の維持を目的として、平成 23 年度より救急医療機関医師勤務環境改善事業補助金交付要綱に基づき補助金が交付されており、現在 14 医療機関・37 名の医師事務作業補助者の育成に活用されているということです。これからますます医師事務作業補助者への役割は重要となるという心強い言葉と、マンゴーやキャビアなどの県産品・スポーツランド宮崎の楽しみもあわせてご紹介いただきました。



▲土井章弘先生（岡山旭東病院）

■プロフェッショナルに学ぶ

招待講演は、土井章弘先生（岡山旭東病院）から、「共育」をキーワードにお話いただきました。土井先生が「実は私の病院は学校です。めだかの学校といいます。病院ではありません。」と話されたときに驚きましたが、続けて「学習型病院を目指しています」と述べられ、そこで勤務する人の笑顔が目に見えるようでした。めだかの学校は、あの有名な童謡のフレーズですが、その中でも賢いめだかになろうという意味を込められているそうです。100 年カレンダーや釈尊の最後の言葉「すべてのものはうつろいゆく 急らずつとめよ」を引用し、毎日を大切に過ごしていこうとお話されました。また、人材教育システムは病院経営の質につながるのとても大切だということでした。赤いお鼻で愛情たっぷりにご紹介いただいた「こそ丸(がん)」を飲めば、夫婦円満で離婚しないという臨床データもあるとか（笑）。是非ご紹介したいお薬です。ご興味のある方はインターネットで調べてみてくだいね。



▲小林宏之先生（航空評論家）

教育講演は、小林宏之先生（元日航航空機長）から、「現場における安全の確保と安全教育」をテーマにお話いただきました。奇しくも、今年は日航ジャンボ機墜落事故から 30 年という節目の年。42 年間空を飛び続けた小林先生は、基本・確認行為を徹底する重要性和有効性を繰り返し述べられました。また、テクニカルスキルに合わせてノンテクニカルスキル（チーム形成・医事、仕事の配分、状況認識、問題解決、コミュニケーションなど）が大切だということでした。さらに、チーム力を発揮するためにはコミュニケーションが深く関係し、その基本は「話 20%：聴 80%」が大事だそうで、アメリカでは昔から「leader の 1 (エル) は、listen の 1 (エル)」とも言われているそうです。私は、数字（割合）が逆転している（聴く姿勢が不足している）かもしれないと反省しきりでした。最後に、地球から教えられたこととして「かけがえのない人生（The Only One Life）」という言葉が挙げられ、かけがえのない人生なら人間的に成長しなければもったいないと締め括られました。「かけがえのない人生（The Only One Life）」を。そう考えると明日の一步が変わるのかもしれない。



▲高橋泰先生（国際医療福祉大学大学院）

特別講演は、高橋泰先生（国際医療福祉大学大学院）による「人口減少社会に向かう日本の医療介護の現状と将来予測」についてのお話でした。高橋先生の抄録にあった「食べられなくなったからあきらめる」という一文をデータに基づき、マクロとミクロの視点の両方を行き来しながら分かりやすくご説明いただきました。ミクロでは見え過ぎて何もできなくなってしまうので、まずはマクロでみていくと、人間関係とか借金は見えなくなり、地域人口や病院数が分かるようになり、そこに必要な病院数が算出で

きる、それをまたミクロに戻して考えたのが地域医療構想だそうです。また、知っておいてほしいデータとして、我が国の人口推移を「明治維新のとき 3330 万人しかいなかったのが 140 年で 4 倍増えており、2004 年をピークに今世紀末までにまた明治維新の時の人口に戻っていく」と示されました。三大都市圏とその他の地域でいうと、医療・介護を取り巻く状況は大きく違うし、年齢によっても違ってきます。例えば、最適な居住地の判断（選択）は、現役世代では大都市志向にならざるを得ないが、年金生活になると入ってくるお金は同じになるので物価が安い方がいい、そうを考えると、「首都圏（大都市圏）から地方へ移住する」という選択肢がでてくるのは必然かもしれません。今後、65 歳以上の人を支える人は加速的に減っていき、「9 人・胴上げ型（1965 年）→2.4 人・騎馬戦型（2012 年）→2.0 人・担架型（2025 年）→1.2 人・肩車型（2050 年）」となっていくということで、個人だけでなく、病院としても地域としても、正しく対応できるよう状況把握しておく必要があります。またフランスの看取りの現状もご紹介いただき、老い方・死に方が変わってくるだろうと締め括られました。「カッコよく老いて、カッコよく死のう」最後のスライドにあったこの考え方を当然のこととして受け入れる時代もそう遠くないのかもしれないですね。

■経験豊かなシンポジストによる、本音の議論



▲瀬戸僚馬先生

シンポジウムでは、大会テーマを踏まえ「職種確立に向けてのアクション」と題し医師事務作業補助者が職種確立に向けてどのようにアクションをおこしていくとよいのか議論しました。

瀬戸僚馬先生（東京医療保健大学）からは、30 年ビジョンをキーワードにお話いただきました。既に、医師事務作業補助者の職種確立が進むアメリカではほぼコメディカル的な位置づけであったり、イギリスでは守備範囲が広くジェネリスト的な位置づけであるようです。そんな中で、2045 年は「多様さ、柔軟さ」が重要になるし、30 年後の「輝く姿」は人それぞれだということでした。



▲東明先生

東明先生（一般財団法人潤和リハビリテーション振興財団）からは、プロフェッションの条件をテーマに、既に国家資格化された理学療法士が抱えてきた課題とどのように対峙してきたかということをご講演いただきました。組織的・教育的な体制構築の重要性もさることながら、カッコいい職名を考えてみてはどうだろうかをご助言いただきました。



▲阿南誠先生

続いて、阿南誠先生（国立病院機構九州医療センター）より、誕生 40 年を迎えた診療情報管理士についてお話をいただきました。その中で、診療情報管理士と医師事務作業補助者との連携は極めて重要で、継続的な



▲小林利彦先生



▲矢口智子理事長

生涯教育が必要だと強調された言葉が印象的でした。また、国際的に認められる職種であるか、定年までその業務を自分がやっているイメージが出来るか、それができなければ発展はないと明言されました。そして、一番伝えたいこととして「現状は医師事務作業補助者の存在は病院にとって都合がよいが、労働者、職能として考えるとどうか、専門性、業務確立等すべての業務が急務である」と締めくくられました。

小林利彦先生（浜松医科大学附属病院）からは、静岡県でスタートした医師事務作業補助者の教育プログラムをご紹介いただきました。メンター医療者がいない、キャリアプランの面倒をみてくれない、必ずしもキャリアデザインを必要としていない職員もいるという現状は、全国的に普遍的な課題のようです。静岡県では地域医療介護総合確保基金を利用し「静岡県の医療クランクを育てる会」が作られ県全体として教育されているようで、大変羨ましくも感じました。

医師事務作業補助者のゴールは、医師に限らず「医療職のサポーター」であり、その役割を院内で確立していくことが必要だという言葉に勇気とやる気ももらいました。

最後に、当研究会の矢口理事長より、職能団体化を目指すという力強い発言がありました。

シンポジストの総合討論では、会場から「医師だけでなく、他の医療職種も救ってほしい」という声や、公立病院の医師からは常勤職員にしてもらえない医師事務作業補助者の現状のお話がありました。これについては、国家資格でないこと、また国立病院であれば公務員試験を受けていないといった直ぐには解決しがたいハードルがあるようです。その中で、アウトカムを示したり、医師をはじめとするリーダーがしかるべき場で必要性を発信していく必要があります。また、診療報酬（加算）に囚われず、医師事務作業補助者がいることの評価（医師の業務軽減、診療の質の向上に寄与していること）を示していく必要があるということでした。



最後に、各シンポジストの先生からのエールをいただきましたのでご紹介します。

◆瀬戸先生より

「2045年、（この職種は）絶対になくなっていませんので、頑張ってください！」

◆東先生より

「矢口理事長が示されたビジョンの達成に向け、期間を定めて頑張ってください！」

◆阿南先生より

「患者さんの前で自分の仕事を説明できることはとても大切。医師事務作業補助者は患者さんのためにいるので自信をもっていきましょう！」

◆小林先生より

「専門職種間の隙間業務を担うスペシャリストとして、頑張ってください！」

日々の業務で気持ちが凹んでしまったら、このエールを思い返すと心新たに頑張れそうな気がします。

■実務直結型セミナーも開催！



▲木佐貫篤先生

2日目に行われたモーニングセミナーは、プログラムの都合上、2会場並行開催だったのですが、「両方の講義を聞きたかった！」というご意見が多く寄せられました。

- ・木佐貫篤先生（宮崎県立日南病院）「病理診断レポートの読み方」
- ・牛谷義秀先生（クリニックうしたに）

「主治医意見書～その意義と記載時の留意点～」



▲牛谷義秀先生



▲井福隆志先生

- ・井福隆志先生（宮崎事務センター）
「障害年金と診断書」

業務に直結するようなセミナーは、実務者が必要としていることをひしひしと感じました。研究会会員ページでご紹介できるかもしれませんので、その際にご聴講くださいね。

■演題発表数は過去最多。評価基準を設け、座長賞・ポスターセッション賞！



実務者による一般演題は、今回 58 演題となり過去最多の応募でした。今回の発表を通し、医療機関や地域ごとの特色に応じて、自らアクションをおこし奮闘する実務者の輝きを感じ、少し前まで課題と感じていた医療人マインドの醸成は随分進んでいると思いました。また今回は、評価基準を設け、セッションごとに最高得点だった方に「座長賞」と「ポスターセッション賞」として表彰いたしました。今後も、色んな場所で実務者による発表が増えることを願っています。

受賞された方は、次のみなさんです。

【座長賞】

- ・上村広美さん（古賀総合病院 診療情報管理室）
- ・佐藤有文子さん（岩手県立中央病院 診療部）
- ・南原寿枝美さん（四国がんセンター 呼吸器科）
- ・高橋里佳さん（総合大雄会病院 MC課）
- ・富樫さおりさん（庄内余目病院 診療情報管理室）
- ・小妻幸男さん（済生会熊本病院 医療秘書室）
- ・安西雅子さん（千葉労災病院 医師事務支援室）
- ・坂田智代さん（東京都済生会中央病院 診療支援室）

【ポスターセッション賞】

- ・園田美樹さん（熊本医療センター 総合情報センター部）



■企業によるバックアップで、さらに充実した時間に！



ランチョンセミナーも、2会場（3企業）で開催されました。宮崎のおいしさがギュッと詰まったお弁当をいただきながらの学びは、とても充実していたようです。ある参加者からは「あの先生、面白いね～」とお褒めの言葉をいただきました。また、多彩な企業展示も大変好評でした。

今回大会開催にあたり、多くの企業・団体様よりご協賛いただいたことを、あらためて深謝したいと思います。

■おまけ～懇親会編～

まずは、懇親会はあっという間に定員に達し、お断りをしたみなさまには大変ご迷惑をおかけしましたことを、改めてお詫びいたします。最後に行ったアンケートでも「懇親会は、いい意見交換・交流の場で楽しみにしていた」というお言葉もあり、とても申し訳なく思いました。

懇親会は、講師陣も全員参加され、美味しい料理やお酒で楽しいひとときを過ごしました。



■オール九州のみんなに感謝！

今回は、九州各地の実行委員で構成された「オール九州」で、全国からの参加者を温かくお迎えできるように鋭意準備を進めて参りました。また、県内の学生ボランティアのみなさんもお手伝いいただきました。最後に、この素敵な仲間たちに心から「ありがとう！」をお伝えして活動報告とします。

来年は、初秋の北海道でお会いしましょう！

